

この手紙で、著者は不完全な旧約の時代の大祭司ではない、真の大祭司が来られ、不完全な罪の贖いの儀式ではない、永遠の贖いが成し遂げられたのだ、と語っています。11～12節で、キリストが、この世的贖いをする大祭司とは異なり、自らの血によって永遠の贖いを成し遂げられた恵みの大祭司であると語っています。至聖所における贖罪の儀式は、年に一度、贖罪日に、大祭司によって行なわれました。しかしイエスはただ一度聖所に入って永遠の贖いを成し遂げました。イエスの十字架の死は、ただ一度で永遠の贖いを成し遂げる力のあるものだったのです。

共観福音書はイエスが十字架の上で死んだ時、神殿の聖所と至聖所とを隔てていた垂れ幕が上から下まで真っ二つに裂けたと記しています。マタイによる福音書は神殿の垂れ幕が引き裂かれた、私たちが神さまと交わる道が開けたと記しています。

著者は14節で、永遠に有効で比類のないキリストの贖罪における血が、私たちの良心を死んだ業から生ける神を礼拝するようにさせると語るのです。礼拝は単なる儀式ではなく、人が生ける神を信頼して生きることもそのものでもあり、私たちの礼拝を礼拝たらしめているのは、私たちの行為ではなく、キリストであると語るのです。

さらに、15節で著者は「キリストは新しい契約の仲介者である」と語っています。新しい契約は神さまの救いの歴史の中で与えられたものです。聖書は、この世の歴史を支えるように、神さまの救いの歴史があると語ります。それはアブラハムを召されたことから始まり、神の民であるイスラエルを起こされ、御子イエスをこの世に遣わされ、十字架の上ですべての人の罪の贖いを成し遂げさせられるという歴史です。そしてキリストは再び、この世の支配者として来て、その救いを完成するというのです。

ここで二つのことが確かなこととされます。一つは、イエスが最初の契約の下で犯された罪の贖いとして死んだことです。新共同訳の「永遠の財産」の直訳は「永遠の遺産」です。「永遠の遺産」とは、キリストの兄弟として神の子にしてもらうこと、神さまを自分たちの神として礼拝することができることと理解されます。また、「既に約束されている永遠の財産を受け継ぐ」の直訳は「永遠の遺産を継承する約束を受ける」です。著者は、いずれ私たちに永遠の遺産が与えられるとキリストによって約束されているから、その約束を信頼しようではないかと語っているのです。

キリストの血によって、既に神さまと人とを隔てる幕は引き裂かれ、神さまとの真実な交わりへと導かれています。十字架において流されたイエスの血によって私たちは、生ける神を礼拝するようになるのです。神さまにより救いを与えられた民として、神さまの恵みを受けて新しく生きることができるのです。